

国語 問題

□ ①の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

普通の生活者は、その追求しているものが、社会通念の上における虚栄や、社会通念の上における実利のみである。一個の林檎りんごのなかにその販売価格を見るのが商人であり、その味を考えるのが一般消費者である。美術家は、その色彩と形の美しさを見る。純粹の消費者、純粹の美術家というものは存在しないが、比較的言えば、生活者は林檎の色彩に無関心である。美術家が、その形と色彩の特色を抜き出して、抽象化し、純粹化して紙の上に描いたときに、はじめて生活者は、その形と色の喜びを理解する。それと似たような形で、生活者は、自分の生活の中にある、真の生命感を悟らないで、実利と虚栄を追い求めるのに全精力を使う。その生命感を抽象化し、言葉を通して書き直して見せる文芸家によって、生活者は自分が行っている生活や、行う可能性のある生活の中での自分の生きている実感を、実利によく喜びや悲しみとは別個の潑刺おぼそとしたものとして初めて理解する。

一枚の木の葉の美しさ、幼児の微笑の美しさ、自分の平常な生活の中にある意味、歩くこと、聞くことの意味は、生活者にとっては捕捉しがたい。文士もまた通常の生活者であるときは、生の実相を、社会や家庭の中で他人との接触、交渉、比較などの中で見出すのが常である。それ故普通の生活を営んでいる文士にとっては、生命感せいめいかんは、対人交渉の中で味われ、そのようなものとして表現される。動かし難いものと意識される秩序の中に生きている人間は、善と悪や美と醜の判断を明確に持っていて、その善の標準から自他の人間の行為や容姿を判断し、その区別感覚で人間たちを輪郭づける。しかし秩序が動揺しているか、自己のその秩序についての判断が動揺している時は、その区別感覚の輪郭の線がぼんやりし、判断は「ブイマイ」になる。

しかもなお、そのような人間関係の中に、普通の生活者は、実利と社会通念による虚栄の満足感とをしか見ようとしなが、文士は人間性全体の相互関係にある力の働き合いや争いや調和の根本形を見ようとする。生活者にとっては多くの場合意味を持たないと思われるものに文士は生命の表現の意味を見て、そういうものの組み合せあはの図式を考える。しかしそういう人間のエゴの組み合せは悲しい、または醜い、または残酷な印象に集中される。生命が拡大しようとして他のエゴや権力に抑止されるときに、初めて生命の存在感は現われる。□ X が生命の実在を認識させるのである。それ故現世的なまたは社会的関連性において人間を描いた文芸作品の中に現われる生命の相は、一般に否定的である。悲哀、苦痛、倦怠、羨望、不安、憎悪等の感情をもって初めて生命が描き出されるのが常である。

だが現世を「ホウキ」したものとっては、実在自体が美しく意識される。対人関係から解放されたとき、急に空の美しさ、山の美しさ、木の葉の美しさなどが意識される。人の姿の美しさもまた日常の生活を共にしている人間に対しては感じられず、自分と利害関係を持たない異性に突然逢った時に強く意識される。そういう肯定的な生命感が最も強く感ぜられるのは、その人間が死ぬことを意識したときである。自分の生命が無に帰し、この世の自然と人間の総てが自分から失われるという意識を持っている人間にとっては、虫も木の葉も、嫌悪と憎悪とで今まで接していた人間も、悉く美しい本来の姿を現わす。なぜなら、その人間にとっては、その時、現世における利害の争いと虚栄の執着が失われ、自然と人とは、その単純な存在として意識されるからである。

そして現世否定によって安心感を得る傾向の強い日本人は、現世の場における力や力の戦いを描くのが下手である。そして遁走とんそうの生活によって自然の美を新しく見出すと同時に、死の意識によって、人と物との個としての生命を把握することが、伝統的に巧みである。

近代の日本文学では、そのような死または無の意識によって描かれた短い小説で名作と言われるものが多い。志賀直哉が「大怪我をしてカリエスになることを気づかずに、温泉にいた時の自然のスケッチである『城の崎にて』」、結核患者である堀辰雄や、尾崎一雄や島木健作や梶井基次郎の短篇小説のあるもの等は、その描写の美しさと鋭さによって強烈な印象を読者に与えるが、それは、死の意識の上に根本から発見された生命の姿であるからである。また良寛の作品のようなものは、死の意識でなく、理念的に作られた無の意識の上に立った人間が認めた生命の相を示している。同型のものと言っべきである。

小説というものが首尾のある物語りでなければならないとか、フィクションでできていなければならないとか、人間を描いたものでなければならないという考かんがえは、これらの作品では成立しないことになる。少なくとも近代の日本文学でこの種のことを小説でないと

国語 問題

すれば、非常に多くのものが小説から失われ、同時にもっと非小説的な自伝小説もまた否定されねばならない。またこれらの作品は、現世の人間関係を描いた作品が否定的情感によって、イジ^{イジ}されているのに対して、肯定的情感によって支えられている。しかも同時にそれは、対社会的に言えば、孤立した、あるいは病いによって、カクゼツ^{カクゼツ}させられた存在の場合にのみ起る美しさであり、また明るさである。というのは、現世の人間関係を成立させている生の基盤は、他者への働きかけや他者からの働きかけが故に、その抵抗感^{抵抗感}は苦しみや悩みとして意識されるものであるが、これらの作品では死や無から見る故に、生は全的に望ましいとして肯定的に見えるからである。前者の人間関係を描いた作品の美観は、相対的比較的なものであるから、音楽で言えば交響乐的に、また絵で言えば画面に空白を置かぬ相関的な手法、即ち西洋画的な描写によってもたらされる。これに反して死や無に基く認識の美しさは、空白の中に僅かに木や鳥を描くような日本画的な描写法でもたらされる。

また無や死の上に立つ生命の認識は、本人が死を意識した時にのみ現われるのではない。本人の肉親、近親、愛人の死によって、自分の生きるこの意味を根本から考え直すような時にも、それが起る。それは実例で言えば、妻を失った上林暁、原民喜、外村繁らの作品に見られる所のものである。また死のみでない。近親者や愛人の狂気や道徳的破壊が起った時も、本人が鋭い認識者であれば、彼は生活することの意味を根本から考え直すことによって、生の認識を新たにするのである。

(伊藤整「近代日本人の発想の諸形式」による)

問一 二重傍線部A、Dのカタカナを漢字に直して書きなさい。(大きな字で丁寧に書くこと)

問二 空欄 X に入る最も適切な語句をつぎの中から選び、記号で答えなさい。

ア 罪悪感 イ 抵抗感 ウ 充実感 エ 安心感 オ 義務感

問三 傍線部1「真の生命感」とあるが、それは「生活者」にとってどのようなものだと筆者は考えているか。つぎの形式に従って、四十五字以内で説明しなさい。ただし、読点や記号も一字と数える。

生活者にとって、真の生命感とは ものである。

問四 傍線部2「死の意識によって、人と物との個としての生命を把握する」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適切なものをつぎの中から選び、記号で答えなさい。

ア 人間は死を意識することで、あらゆる生命が失われることを想起し、個としてかけがえのない存在である自分の生命が実感できるということ。

イ 人間は死を意識することで、自分も死体という物質に還元されるという、生命についての普遍的な事実を思い出させられるということ。

ウ 人間は死を意識することで、個人的な感情や思い入れが消え去り、身の回りの物や人間がもつ生命本来の姿を理解できるようになるということ。

エ 人間は死を意識することで、社会的な存在である人間にとっての生命である、人間同士の争いや調和の仕方がよく見えるようになるということ。

オ 人間は死を意識することで、はじめて自分が生きるこの意味を発見し、自然や人間の美しさを言葉で表現できるようになるということ。

問五 筆者は「日本の近代文学」の特徴をどのように捉えているか。本文全体の内容を踏まえ、五十字程度で説明しなさい。

問六 傍線部3「志賀直哉」が文学史上で属する文芸思潮を答え、またおなじ思潮に属する文学者の名前を二つ書きなさい。

国語 問題

② つぎの文章を読んで、後の問いに答えなさい。

師頼の中納言、参議の時、人に超えられて、籠居ひさしくして、たまたま中納言になりて、その始めの出仕に、積奠にいでられたりけるに、作法進退の間、事において不審をなして、傍の人に問ひ事をす。そのとき成通卿、ひさしく参議にて座に列ねけるが、師頼卿に語りけるは、「ひさしく御出仕も候はで、公事御廢忘か」といひたりけるに、師頼卿、返事をはいはずして独言してはいはく、「*大廟に入りては事ごとを問ふ」といはれたりければ、成通は、しぬるやうに覚えて、あせ水にぞなられたりける。後に人に語りてはいはく、「あさましかりし事かな。なごさるごとをいひけん」とくやしまれける事かぎりなかりけり。

此事、本説は、

①

此事を思ひて知りながら問はれるを、浅くいひなして、本文を誦せられて、かなしがりけるなり。

晴にて人に物を問ふは、くるしからぬ事にてあるなり。失礼をこそ謹め。孔子云「②」。これも同心也。

『続古事談』による。本文を一部改変した

(注) *積奠 孔子とその弟子を祭る儀式。

*大廟 帝王などの祖先を祭る場。

問一 傍線部A「しぬるやうに覚えて、あせ水にぞなられたりける」とあるが、なぜ成通はこのような状態になったのか、その理由を説明しなさい。

問二 傍線部B「し」について、文法的説明として正しいものをつぎの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 形容詞の一部分・連用形 イ 完了の助動詞・未然形 ウ 過去の助動詞・連体形

エ サ行変格活用動詞・終止形 オ 断定の助動詞・已然形

問三 空欄①には、『論語』のつぎの文章とほぼ同じ内容が書かれている。これを読んで、後の問い(一)(二)に答えなさい。

子入^{リテ}ニ大廟^ニ、毎^ニ事^ヲ問^フ。或^{ヒト}曰^ク、執^ス謂^フ、すう郷人之子知礼乎。入^{リテ}ニ大廟^ニ、毎^ニ事^ヲ問^フ。子聞^{キテ}之^ヲ曰^ク、是^レ礼^ト也。

(注) *郷 孔子の父が長官をしていた、魯の国の一地方。

(一) 傍線部C「執謂郷人之子知礼乎」の書き下し文は「孰か郷人の子を礼を知れりと謂ふか」であるが、これに従って、解答欄の文に返り点をつけなさい。

- (二) 傍線部C「執謂郷人之子知礼乎」の解釈として最も適切なものをつぎの中から選び、記号で答えなさい。
- ア 郷人の子孫の中で、誰が儀礼に精通しているのだろうか
- イ 孔子が礼に習熟した人だと、いったい誰が評判を立てているのか
- ウ 孔子とその父親だけが、儀礼の意味を理解していると言えるのだ
- エ どうして、誰も孔子に儀礼について教えてやらなかったのだろうか
- オ 大廟の礼については郷人が最もよく知っている、誰もが言っている

国語 問題

問四 空欄②には、つぎの傍線部のいずれかの文が入る。その傍線部のある選択肢の記号を答えなさい。

ア 知者不言、言者不知。塞其兌、閉其門、挫其銳、解其紛、和其光、同其塵。是謂玄同。

イ 蘇秦以鄙諺說諸侯曰、「寧為鶏口、無為牛後」。於是六國從合。

ウ 子曰、「由、誨女知之乎。知之為知之、不知為不知。是知也」。

エ 問曰、「汝与回也孰愈」。对曰、「賜也何敢望回。回也聞一以知十。賜也聞一以知二」。

オ 夫龍之為蟲也、柔可狎而騎也、然其喉下有逆鱗径尺、若人有嬰之者、則必殺人。人主亦有逆鱗。說者能無

嬰人主之逆鱗、則幾矣。

問五 この説話集の作者は、「礼」とはどのようなものであると考えているか、説明しなさい。

三 つぎのアイウからテーマを一つ選び、理由や根拠を挙げて、自分の考えを述べなさい。なお、各テーマとも時代は問わない。

ア 意義深いと考えている日本の文化について

イ おもしろいと思っっている言葉の問題について

ウ 難解だと感じている文学者や文学作品について